

付 記

本稿の最初に『クロハタ』編集部の方が断わられた通り、これはかつて福岡の『平民新聞』に書いたものを、殆んどそのまま転載したのである。最初は、これが終るところまでには続きが書けようかとも思っていた。しかし私の健康はそれを許さない。尻きれトンボにしてまことに相すまぬと思っている。

なお私は、戦前および戦時中のことでは、◇無政府主義文学運動、◇石川三四郎の月刊『ディナミック』およびルクリュ研究会、◇長野県事件、◇無政府共産党事件、◇戦時中の社会状況、などにつき述べたかったことを付記しておく。これらのこと、および第二次世界大戦後の日本アナキズム運動史については、誰かが改めて、もっと詳しく書いて下さると思う。ぜひそうしてほしいものである。拙稿がその参考になれば幸いである。

(注) 本稿ははじめ杉藤二郎氏によって一九五二年より福岡で発行されていた旬刊『平民新聞』(孔版印刷)に連載され、その後『クロハタ』第34号と第61号(一九五八年一〇月と一九六一年一月)に転載された。転載に際して、そのことを編集部が注記したのである。

解 説

秋 山 清

解説——といっても私がここに書くものは、この運動史をよんだ私自身の感想でしかない。しかしこれを読んで私はかなり大きな、またいくつかの感想をもった。それをここに書きつけることは、はじめてわがアナキズム運動の過去を知ろうとする者のために、役立ち得ることもあるだろうと思う。たとえばこの運動史は、どこに、どのような重点をおいて読むことが必要か、ここに書かれた時期を挟んで省みておくべきものもまた在るのだ、というような、要するに私のこの感想は、この運動史に、あるアクセントをつけるもの、といったそれらのことにはなるだろう。

近藤憲二による『私の見た日本アナキズム運動史』ははじめ日本アナキスト連盟の機関紙『クロハタ』(一九五八年十月)に連載されたものである。明治四十三年の売文社の創立から筆を起して昭和における労働組合の分裂とその再統一までを述べたこの運動史は、記

憶さるべき大正期のアナキズム運動を語ることが主眼となつてるところから、『大正のアナキズム運動史』と呼んで然るべき性格のものであり、それは大正における活動によってわが国のアナキズム運動が一時期を画したことに依るものである。

わが国のアナキズム運動が思想活動と労働運動との画面において実力を発揮したのは大正中期の数年間であったといわれることは否定すべくもない。この運動史がその時期を語ることに力を入れているのも当然のことである。

思想のアナキズムを労働運動の中に生かすことによつてわが国のアナルコ・サンジカリズム培養にもつとも指導的役割を果たしたのが大杉栄であることは周知のとおりであるが、彼の活動が大きな影響力となり得たには、すぐれた協力者のあったことを見逃してはならない。この運動史の著者もまた、その期間にもつとも献身的な努力と協力をこの運動の中でつづけた一人である。だからその主要な部分において、この著作は、わが経験を語ったものといつてもいい実証性をもっている。他の誰によつても描き得ない中味が、ここ

に抽出されているものがある。

もしこの運動史の弱味を指摘するとすれば、毎回ほぼ一定のスペースで書きすめられたために、事績の大きさと重さが、そのスペースにうまく合わなかったような、ある止むを得なさがなかったといえないことである。そしてどちらかといえば、自責心の克つた著者はしばしば、自分の直接経験した事実についての筆が、かえって簡略されているようなきらいさえあるかに見えることがある。

たとえば大正七年の北風会から、昭和三年に至る第四次「労働運動」刊行までの、アナルコ・サンジカリズムの活動の熾んだった時期の記述も、社会主義同盟、その他の共同戦線の活動を叙する筆つきも、濃淡轻重を特に感じさせないくらいである。自分と自分の携わったことにたいする評価などを特別に語りたくなる傾向にくらべて、この著者がとうとうとした記述態度は拘すべき風格であるが、大杉の死以後の、たとえば黒色青年連盟の出現、自連の分裂等の時期以後の、思想活動と労働運動にたいするこの著者の見解と批判など、戦後に運動に加わった者らのもっとも期待する

ところであつたが、その辺の叙述もまたすべて簡略に事実の経過を述べる、といった態度に終始している。むろん、そこには深い考えがあつての事かと思う。かつてわがアナキズム運動が一貫して語られることすらなく、だからとりあえず、素描的運動史を残して、後進の研鑽をうながしたいという考え方である。そのことは時に著者のもらしたところであつた。また、労働運動における自連と自協の分裂対立と、やがてその再統一まで数年にわたつて全戦線が対立抗争した事実、昭和の文化運動に関する調査、その後の農村青年社、無政府共産党の活動に至るまで、手をつくして、蒐集は進んでいたものと見えながら、病気のため中絶するに至つたということも、この著者のために語っておかねばならぬことである。要するに、大正を主として昭和が簡略されていることには、そのような理由の重なりがあつた。

「私の見た」運動史、という限定のために売文社の出版から書き始められたのである本書が、これをわが「アナキズム運動史」として読むためには、本書の冒頭以前のかかれざる部分として明治に大逆事件等のあ

つたことはいふまでもない。そこで私は、明治のアナキズム運動と大正のアナキズム運動とのかかりについて少し考えてみたい。

幸徳秋水はわがアナキズム運動において如何なる位置を占むるか、と設問してみる。大逆事件によって記憶されるのみの幸徳秋水であつてはならない、その幸徳のアナキズムについてである。

幸徳と大杉のいづれが進んだアナキストであるかという質問に私もどこかで出遭つたことがある。何の会合のときだったか、その間に荒畑寒村が答えて「大杉である」と即座にそういうのをきいたこともあつたが、究極においてその答えは正しいであらう。幸徳と大杉の関係は、明治社会主義運動史の中ではリーダーと後進の関係にあつたが、アナキズムへの開眼においては必ずしもそうではなかった。

「私の考えではこのころ（注・明治四〇・四一年）の大杉が、当時の誰よりも西欧のアナキズムについての知識をもつていたことはたしかだ……」（『大杉栄研究』大沢正道）と書かれたように、わが国のアナキズム運動の最初において大杉は早い知識の所有者であつた。幸

徳秋水が渡米（一九〇五年）のとき大杉にバクーニン全集を贈つたと伝えられているが、つまり二人はそれほど離れていない時期にアナキズムに目を向けたのであり、ただ平民社その他の活動で国際的に名を知られはじめた幸徳が、クロボトキンまたはその系統の人々と知識的交流を得て、さらに一九〇六年にアメリカから帰朝しての第一声があつた「世界革命運動の潮流」となつて、普通選挙運動を第一の狙いとしてきたかのような在米日本の運動に批判的な新しい態度を示したところから、幸徳がわがアナキズム運動の指導者となつたのは当然のことであり、大杉栄はその時から二年後の赤旗事件で入獄し、この間に幸徳は大逆事件に至るまでのアナキズム活動を展開したのである。アナキズムを挾んでの幸徳と大杉の関係は、ほとんど同じところから出発していたが、ただすべての経歴と経験において幸徳はるかに勝り、それだけアナキズムにたいする注目も発言も幸徳が先んじたということである。

大杉は幸徳に十三年おくられて死んだ。すくなくともその年間だけアナキズムへの研鑽も運動量も大杉にふかまるもののあつたこともまた見易いことである。そ

してわがアナキズムの運動史におけるこの二人の関係が、幸徳が開拓者で大杉が実行者であったということに至るのも常識通りのことである。

二人とも、アナキズム運動の実践としてまず労働運動に期待した。二人の運動における重なりはこの点にもっとも符節を合わすものがあつた。幸徳秋水はアメリカから帰つての最初の発言が「世界革命運動の潮流」であり、つづいて約半年後に『平民新聞』に「予が思想の変化」を書いて、アナキズムをもってわが革命の思想とすることを明らかにし、アナルコ・サンジカリズムをもって運動展開の方法として主張したとき、始めてわが国にアナキズム運動が芽生えたといえる。さらに加えるに幸徳の二度の主張の中間で石川三四郎の「堺兄に与えて政党を論ず」が『平民新聞』に発表されたとき、大正・昭和に於るアナキズム運動の礎石は据えられたといえるだろう。そのなかで石川は「革命は予言にあらざり、示威運動にもあらず、直下の実行にありて現にあり、政治上においては政治組織の転覆にあり、宗教上においては衷心の悔改による新生命の発現にあり」「政党は個人の主観的權威を感

ることなくしてひとり客観の多数によつて事を決す」「階級戦争を貴かんと欲せば、政党よりはむしろ労働組合の発達に力をつくさざるべからず。——しかり同盟罷工、同盟罷工、これ階級戦争の最重必至の陣立てなればなり」といつて幸徳の直接行動論に応じつつ、幸徳が未だ発言しなかつた政党政治の否定においては、先んじてさへいた。

この時から約一年半後に赤旗事件、さらに二年後に大逆事件の検挙がはじまつたのである。

赤旗事件で入獄した大杉栄が千葉監獄から出て、先に出た堺利彦が始めていた売文社に加つたのは大逆事件進行中の一九〇九年（明治四三）の十一月であつた。翌年一月幸徳等処刑、大杉はその後で「春三月縊り残され花に舞う」の句を詠んだという。売文社を始めた堺は幸徳とは永い同志であつたが、アナキストとして運動に出発した大杉にとってはすでに同志ではなかつた。日本の社会主義運動の上では先輩と後輩であるが、アナキズムとマルキシズムの対立はこの頃から萌し、アナキズムが社会運動として実践されるに仕がつてその対立の度合が進んでいつたのである。この

『私の見た日本アナキズム運動史』がその冒頭に「売文社の創立」を持ってきたことについて私には、いささか感想がある。売文社内部において未だ顕著な対立を示さなかつたのは、売文社が社会主義者の集団ではあつてもそれは生活のための集まりであつて運動の集団ではなかつたからであらう。冬の時代に活動を志した大杉、荒畑の『近代思想』の刊行から漸次相互に批判的となつた経路がそれを語っているのではないか。

私がこの運動史の解説として、ここに書かれていた以前の幸徳、大杉、石川のことに触れたのは、この運動史を読むためには、大逆事件に至る、あるいは売文社創立に至る、その以前におけるアナキズムの芽生えを知つた上でこの著述に向ふことが、この運動史の時期をわが国の近代史の中に見定めるために好都合であらうと思つたからである。

幸徳秋水の直接行動論がいわれたときのことをその後の評論家などが「当時まだ労組の組織もない時にゼネ・ストとは何事だ」といつて、幸徳の発言に労働者の組織を期待する意図を見なかつたのと同じように、石川三四郎の社会主義政党への反対を理解する者もい

なかつたが、「政党はかえつて革命を鎮圧する」といつた先見は、戦後の社会主義政党の変貌を見ると、なお生きていることを思わねばならない。

大杉栄のアナキズムへの目ざめは時期的に幸徳・石川に遅れてはいないと見えるが、彼の活動がその後には比重のあつたことはいうまでもない。大逆事件後のいわゆる冬の時代に目ざましをかけた『近代思想』は文芸思想誌として出発し、その活動の影響力は巾ひろく、それは名文家として知られた幸徳の文筆活動と並ぶ以上のものとなつた。幸徳が直接行動によつて労働者の組織とその実行を期待したように、大杉栄は荒畑寒村とともにサンジカリズム研究会をはじめて、やがて来るべき労働運動への同志を育てつつアナキズムの研鑽につとめた。この間における大杉の動きは先輩幸徳の意向を十分生かそうとすると見ええるものであつた。しかし二人の活動の間には大逆事件というものが横たわつてゐる。大杉の活動がその初期、インテリゲンチヤ向けの啓蒙的活動として存在したのは止むを得ない時代的制約であつたであらう。

近藤憲二によるこの運動史がその全量の七〇パーセ

ントを大杉栄生前の活動に終始したのはこれもまた当然のことであった。幸徳・石川によって萌芽したアナキズムが思想としてふかまり、実践されるようになったのは、大正に入ってから、大杉が中心となつての諸活動からであつたからである。だから冒頭に売文社の創立が語られたのにつづけて、すぐ『近代思想』の創立となり、やがて、アナキズム運動を展開した事実に沿つて、この運動史もまた展開している。

『近代思想』から『平民新聞』(月刊)へと、いわゆる「インテリ相手の思想的マスターベーション」から労働者に向ける活動へと大杉は一步前進を企画したのであるが、これは労働者に働きかけ、組織するまでの力となる以前に、官権の弾圧によつてつぶれた。受入れられるにはまだ労働者の力が弱かつたし、大杉・荒畑を中心とするグループの力も権力の前に弱かつたからである。そして『平民新聞』の廃刊、『近代思想』の復刊に移つてゆくのであるが、わが国の社会情勢もまだ彼らの革命的な意図を発揮させるまでには至つてなかつた。

しかしすでに始まつていた第一次世界戦争、やがて

来たロシア革命、戦争による物価高と労働者の階級的自覚と実力の増進、シベリヤ出兵、米騒動、ストライキの続発、という風は大正中期の状況は進んでゆく。そしてようやくアナルコ・サンジカリズム的な労働運動の指導が生きて来るのである。私には大正のサンジカリズム的労働運動の強まりには幸徳の直接行動論以来の思想的蓄積と啓蒙が背後にあつたことも要因の一つであつたと考えられる。運動の歴史的精神的つながりをそこに見るのである。

大杉を指導者とする大正のアナキズム運動についてこの運動史は、月刊『平民新聞』の発刊、『近代思想』の復刊、ロシア革命と米騒動、国際労働会議、無政府主義団体「北風会」と筆を進め、そして大正八年(一九一九年)の『労働運動』の創刊に到着する。長かつたとはいえない大正期のアナキズム運動の、ここまでを前期と見ることができると私は思う。社会にたいし、インテリゲンチヤにたいし、労働者にたいしてのアナキズムの啓蒙期であつたのである。

アナキズムとは何であるか。

アナキズムのマルキシズムとのちがひ。したがつて

「革命」とは何であるかのちがひ。

アナキズム運動の当面するものとしての労働運動――アナルコ・サンジカリズムとは何であるか。

これらのことはこのときの数年間においてようやく明らかにされたのである。

階級的自覚から、支配者資本家への抗争、権力の否認、労働者と労働運動の自主自立、これらの現実におけるいわゆる社会主義、マルキシズム等との相違はようやく明瞭にされたのである。ロシア革命は、絶対的権力も民衆の反逆によつて覆滅されるものであることをおしえたが、また無産階級の名によるといえども政治権力の集中による国家と政府の出現とその在り方が、民衆の革命精神に叛き、ふたたび民衆を支配するものであることを証明するものであつた。この証明を反権力の立場、反国家の立場において経験的に把握し得たことによつて、アナキズムの理論と精神は立証されたのである。

幸徳秋水の「直接行動論」以来の主張がここにその一到達点を示したのであつた。私はこの運動史を読みつつ、明治四十年(一九〇七)の日本社会党内におけ

る対立が、この時その終結に至つたことを思つた。幸徳の「余が思想の変化」の意味がひろく明確にされたのであり、言葉をかえれば、この時、北風会の活動の時期に日本の大正のアナキズムは確立されたといえるのである。

このときまでのことに私は特に次のように注目する。それはアナキズムとサンジカリズムの關係についてである。昭和初年に至つてわがアナキズム運動は、労働運動にたいする考え方の相違から分裂が起り、はげしく対立抗争するに至つた。そのときの労働運動への否定的解釈と、幸徳、大杉、石川におけるサンジカリズムへの態度との相違については考えさせられるものがある。私が大正のアナキズム運動の充実期(後半期)とかんがえるのは大杉栄が、和田久太郎、近藤憲二、伊藤野枝らと月刊『労働運動』を創刊した後のことである。

その『労働運動』創刊の章には左のように書かれている。

『労働運動』は創刊号に次の如くその態度を表明

している。」

「労働者の反資本主義的感情が混とんたる紛乱状態をえがきつつ、向う見ずに狂奔してゆくのもおもしろい。その狂奔の間には各々の力が自然に相衝突し相平均して、各自の進路が自然に明確になって行くだろう。しかしまた、その間の各々の力が自己の進路や他の力との衝突や平均を確実に意識して行きたいという努力を起すのも、やはり自然のことだろう。」

「僕らは今、この努力の促進を日本の労働運動そのものための僕らの主要な役目の一つだと考えている。本誌はその機関なのだ。日本のあらゆる方向における労働運動の理論と実際との忠実な紹介、およびその内容批評、これが本誌のほとんど全部だ。」

「ただ僕らには僕ら独自の観察がある。そしてその観察の上からの紹介や批評には僕ら独自の、多少の臭味が現われるのもまた自然のこととしてよきなことであろう。」

「この臭味とは、すなわち無政府主義ないしアナール・サンジカリズムであつたのだ。」

に、もつとも大切な資料であり回想であるものとして、この「アナキズム運動史」のその後の部分が書かれた意味もあるように思う。

昭和のある時期には一部のアナキストの間に、大杉栄はサンジカリストではあるがアナキストであつたのか、という疑問が提出されるまでに至つたのである。大杉の死後におけるこの疑問は、大杉のアナ・ボル共同戦線の実践に反対した『労働者』の人々の主張とは異っていることを確認しておかなければならない。

大杉は社会主義同盟の結成された大正九年に上海に渡つてコミンテルン主催の極東社会主義会議に出席して、帰国するとその翌年第二次『労働運動』を主宰刊行して、ボルシェヴィキとの共同戦線を布いた。これには反対者が大杉に近い人々からも出た。そのところをこの運動史の記述は「この『労働運動』でのアナ・ボル共同戦線にたいしては、共産主義者の間からもこれを冷笑しているものがあつたごとく、無政府主義者の間にもこれを不満としたものがあつた。村木源次郎、宮嶋資夫らがそうであり、吉田一、高尾平兵衛らの月刊『労働者』の同人もそうであつた。『労働者』

この記述はまことに重要である。労働運動の全体的な動きに即して報道し、批判しつつ、勃興期の錯雑な日本の運動がなおつづくであろう時期に向かつて、その進路——労働階級解放の進路を見さだめるために努力しようというのであるから。近藤は、その努力の中にアナキズムの主張があらわれるのを止むを得ないといっている。これは下手に出ているが、「労働運動社」そのものの日本の労働運動における確たる方向への自信を示すものである。

昭和のアナキズム運動は、このときの『労働運動』に示されたように、労働運動とアナキズムのかかわりを統合的にとらえることに各かであつた。『労働運動』によつて進められた、労働運動と労働者の中にアナキズムを生かしてゆこうとすることを、昭和の初期のアナキストは重んじない方向に行つたということである。そのような趨勢が何故に起つたかについての詮索はしばらく措いて、それはともかくアナキズムと労働運動との分離となつたのである。このなりゆきがアナキズム運動の革命的立場からの不当を考へるため

は大正十年四月に創刊され、四号までつづいた。」と軽く書いているが、私はこゝらあたりのことはもつとくわしく、当時の対立の姿をもう少し明確に描いて欲しかつたと思う。その『労働者』の人々が後に多くボルに転向したとはいえ、後に大杉もその非を認めたようにアナ・ボル共同戦線は失敗だったのであり、その時点においては彼らの方が正当性をもつたといえるものだからである。このとき反対されたのは、労働運動についてではなくボルシェヴィキとの共同戦線そのものであつた。昭和に入つて、当時の総合的なアナキズム系労働運動の組織であつた労働組合自由連合会内部に分裂が強いられ、アナキズムの立場からする、労働組合と組合組織の労働運動の否定であつた。いいかえれば幸徳秋水の直接行動論にはじまつたアナール・サンジカリズムの労組運動は大正期にある発展を見たが、昭和に入つてその運動の革命性が疑われ、したがつてその組織的活動もまた否定されたのである。これは労働運動のみによつて革命運動は進展しないという意味ふかい示唆を含むものであつたが、それが労働組合と労働運動の全否定にまで至つたこ

とは、逸脱であったと現在においては、いうことができる。
きよう。

大正八年の『労働運動』の創刊以後の大正アナキズム乃至アナルコ・サンジカリズム運動の昂揚期の記述としてここでは、印刷工組合『信友会』、新聞工組合『正進会』、日本最初のメーデー、ボルシェヴィキに対する宣戦、全国労働組合総連合の計画、決裂、などの章がつづいている。そして大杉の渡欧と帰国後の死、かくして大正末期のテロリズムの時期に入る。

私の見るところでは、このあたりまでの記述は特に正確であり、重点的でもある。一般に大正十二年の大杉の死によつてのアナキズムは革命運動として後退を止むなくしたようにいわれているが、現象的にはそうであったとしても、その要因は他に求められねばならない。

ロシア革命以後のボルシェヴィキの国内における勢力拡大がある。アナキストの転向も頻々たるものであった。さらにアナ・ボル共同戦線を拒否した『労働者』のグループも高尾平兵衛、吉田一、和田軌一郎はボルシェヴィキに転移していった。ロシア革命への批

動を排撃しつづけてきた無政府主義諸団体は、この日、大挙して会場へおしかけ、政治運動反対の運動をした」(『黒色青年連盟』)

のであり、このときのアナキスト諸団体の連絡機関として『黒色青年連盟』(略称黒連)が結成されたのである。無産政党の出現とともに、とおく明治三十九年に石川三四郎によつて予見されたアナキストの政党への不信と否認が改めてここに実行されたのである。労働運動、思想運動、政治運動におけるアナキズムが打揃つて現実化したのであったが、この時期すでに退勢にあつたアナキズムは、その退勢を心情的な革命主義によつてカバーせんとする焦りを見せはじめた。「その後の黒連」の章は控え目だが正確にこの間の事情を伝えている。全国的な思想団体となつた黒連の動揺と内部的対立、崩壊過程である。

「昭和三年に関東黒連に内部紛争がおこり、……きっかけは一部(内部)にたいする批判である。これを会員全体の問題として論議することなく、いきな

判によつて、国家及びその政治権力を否定して、はじめて革命思想としてのアナキズムを確立し得たと見えたが、ボルシェヴィキ革命成功の現実に出逢うと、もちろんアナキズムが放棄されるという状況があつた。その時、大杉の死がそれに重なる。その退勢的状況のなからテロリズムが考えられるに至つた。むろんその以前からテロルの企図はあつたが、それが集団をつくり、活動を企画するということは、労働運動、文化運動を含めての退勢の下に進められたようである。それに伴うものは心情的主観的な暴力主義のエスカレーターである。自己を革命に賭けるという心情のためには、日常的闘争、あるいは日常的組織は迂遠なものに見えてくる。それが大正十四年、治安維持法と引換えに普通選挙法が議會を通過した時点から、簇出するであろう無産政党の出發に対する反政治反政党運動となつて現われ、

「大正十四年十二月一日、神田青年会館で農民労働党の結党式が行なわれることになった。かねて労働者農民の自主的運動を主張して、無産階級政治運

りマルクス主義者であると一方的に排撃し……連盟の内外にアナキズムとサンジカリズムとの論議が起り、純正アナキスト派のなかにアナルコ・サンジカリズムを革命の妨害物なりというものさえあつて、……最初は無政府主義諸団体の連合体であつたものがついに『黒連』と称する一小団体の観を呈するに至つた……」

一黒連の崩壊はそれほど問題ではないが、その崩壊過程の及ぼした運動全体への影響には、かえりみて、まったく大きなものがあつた。総じてそれはマイナスのつよい影響であつた。

私は当時黒連の活動のバックボーンとなつていた純正無政府主義を、わがアナキズム運動史上に現われた重要な思想だと考える。あくまで観念的に追及されたアナキズム、この果すべき役割は今後にあると思つてゐる。重要なことは、一切の組織とそこに生ずる集権性を排除する方向を、各個人の生きる上にまで如何に生かすか、日常生活を無視するまでの革命性を現実的に何によつて支えるか、の問題が残つてゐる。変革を

近藤憲二（こんどうけんじ）

1895～1969年 兵庫県生まれ

大杉の片腕として1919年大杉らと『労働運動』を創刊。大杉死後も労働運動社の中心として活躍した。戦後、日本アナキスト連盟の書記長をつとめた。

編著書

『一無政府主義者の回想』（平凡社、1965）

『大杉栄全集』（アルス、1926）

近藤憲二著・秋山清解説

私の見た日本アナキズム運動史（増補）

1969年6月30日初版発行

1972年4月12日増補発行

定価300円

麦 社

東京都豊島区南池袋1-15-21 田中ビル
電話(03)987-5765 振替東京144722

目的とする運動の中で特定の時期における特定の活動家の活動以外には、個人の生活を民衆的に自由にあらしめるという方向が、ボルシェヴィキの革命にたいする大正のアナキストの掬りどころであった。大正末から昭和五、六年頃にかけての純正アナキズムがそのまま黒連などの実際運動であったとは考えないが、彼らは純正アナキズムを主唱することの反面、文化、労働、思想、生活の各方面における各種の運動への蔑視が極端だった。この現象の一因はアナキズム運動自体の当時における弱体化にあったが、内部的には生活的日常的運動を観念的な破壊運動の主張の下に敷きこんだことの誤謬にあった。

昭和七、八年における農村青年社の結成、解放文化連盟の組織、自連と自協の合一、無政府共産党の出現などは、そのような状況への反撥乃至反省として生れたものであった。十分その実績を挙げるまでには至らずして軍部ファシズムと戦争に巻きこまれて終わったが、戦後、あるいは今後の運動は、これらのことの解明の回想の上に立つことが必要であろう。

『私の見た日本アナキズム運動史』の著者近藤憲二

が、もし中途に病にたおれなかったら、この問題を、この運動史の中に展開したであろうことはほとんど確実である。この私の感想は、書かれなかった部分が、そのような意味をもつて存在することをいいたかったのである。

なお、アナナルコ・サンジカリズム、政治と権力の否定、個人の自由等々のその主張を噴出してきたわがアナキズムの歴史は、労働運動その他の、どこにもある階級的闘争の形態から脱する新しい運動形態を萌芽しつつある。戦後すぐの日本アナキスト連盟の萌芽から解散までの活動は、むしろ戦前の社会主義的活動のしきたりをくりかえした部分が多い。その意味で一九七〇年代の運動には、この運動史の時期及び戦後の二十数年を超える新しさを期待されねばならない。運動の歴史を一個の踏台とするためにも、この小運動史を読み直す意味は深かろうと思う。（一九七一年九月）

13/3/10